



AI世代の君たちは何を学ぶのか

世界に羽ばたけ、女性サイエンティスト

先輩女性研究者から珠玉のメッセージ

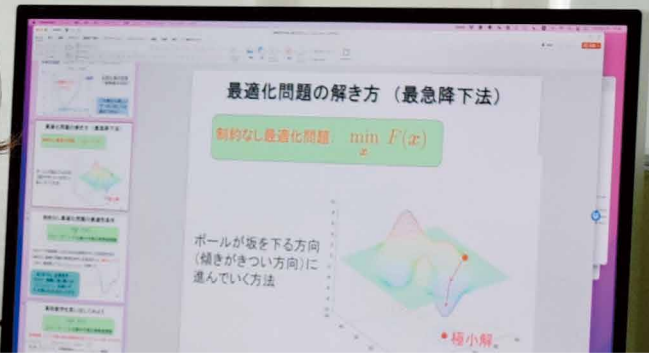
高校生のあなたは、何を学び、将来何を目指すべきだろうか。AIをはじめとする科学技術や社会情勢が目まぐるしく変化する現代において、若い才能を活かすチャンスは理系や研究者の道かもしれない。参考にすべきは、先輩の女性研究者たちの歩みだろう。先輩たちはどのような道を歩み、どのような研究をしてきたのか。第一線の女性研究者からあなたに珠玉のメッセージをお届けする。

P1. 武田 朗子さん | P3. 河崎 史子さん | P5. 熊谷 和実さん
P2. 鈴木 久美さん | P4. 関坂 宏子さん | P6. 橋本 悠香さん

東京大学大学院
情報理工学系研究科
数理工学専攻 教授

理研AIP
連続最適化チーム
チームリーダー

たけだ あきこ
武田 朗子さん



方程式でビデオの最適3倍速切替時間を計算 …中学時代に数学の社会的応用を発見

数学は実社会ではどんなことに役に立つのか。AI世代のいまどきの高校生もきっと、そんな疑問を抱いていることに違いない。

応用数学者で東京大学大学院教授を務める武田朗子さんは「数学が世の中に貢献できると知ったのは、映画好きの母のおかげでした」と話す。中学生の頃、母親はVHSビデオテープにテレビで放映される映画を録画していた。テープの録画時間は120分。そこに135分の映画を録画するためにはどうすればいいのか。普通の方法は、通常モード以外に画質が悪くなる3倍速モードも使わなければならなかった。どのタイミングで3倍速モードに切り替えればよいか？ 母親が悩んでいた問題を数学的手法で解決したのが武田さんだった。

「方程式で計算したら、録画をスタートして112分後に3倍速に切り替えれば、劣った画質の録画は最小限で済むとわかりました。このとき母親が喜んでくれて、数学も人の役に立てると思ったんです」と武田さんは振り返る。

このことは現在の研究テーマである数理最適化にも繋がっているようだ。

「数理最適化とは目的を達成するための最善の手段をみつけることです。世の中のさまざまな問題の制約下で、利益を最大化して、コストを最小化する数理モデルを考え解法を提案するものです」

公式の丸暗記はせず

解

法を考えると、高校数学で習う合成関数の微分、最大値、最小値、増減表などの知識と論理的思考が必要になる。そのため武田さんは高校時代、数学の成

績が飛び抜けていたのだろうと思いきや、実はテストの点はそれほど良くなかったそう。

「数学の公式は暗記しなくても考えればそれを導き出すことができたので特に覚えませんでした。だから解答までに時間がかかり、制限時間のあるテストではいい点はとれませんでした。でも論理的に導く力を強化することになったと思っていますよ」

高校では数学以外の科目も不得意とならぬよう勉強しつつ、部活のフィギュアスケートにも熱心に取り組んでいた。

世の中に役立つかで進路決定

や

が卒業後の進路を選択する時期が訪れ、こだわったことはいかに世の中の役に立つかということ。選んだのは慶應義塾大学理工学部の管理工学で、数学を使って経営の効率化を目指すというものだった。しかし学部を卒業し、慶應の修士課程へと進むにつれ研究したいテーマは変化し、博士課程では東京工業大学で数理・計算科学を専攻した。

「やりたいことが変わってもいいんです。私はおもしろそうなことや新しい環境に飛び込むことが好きな性格ですね」

博士課程修了後、東芝研究開発センター

の研究者として勤務した。

「大学研究室の机上の空論より、やってきたことが本当に社会で使われるか見たかったからです。数年間の勤務でしたが、楽しかったですね」

その後、結婚し、研究職を続け、大学講師、准教授などを経て、2018年に東京大学大学院教授に就任し、2022年から現在の数理工学専攻教授を務めている。

妄想が現実となったときの喜び

研

究職の醍醐味とはなんだろうかと。「他より先に新しいことをやらなければというプレッシャーはしんどいときもありますが、妄想したことが現実となったときの喜びは何事にも代えがたいですね」

今、将来の進路を考える高校生に伝えたいことは…。

「幅広く勉強しておく、変化が起きてもフレキシブルに対応でき、モチベーションを保てます。女性が研究職を選んでもワークライフバランスがとりやすい。なにより新しいことに取り組めて毎日ワクワクして飽きないですよ」

武田さんは未来のサイエンティストにこのようにエールを送った。

経歴

たけだ・あきこ 慶應義塾大学理工学部管理工学科を卒業後、同大学院修士課程、東京工業大学数理・計算科学専攻博士課程を修了。東芝研究開発センター研究員、慶應義塾大学理工学部管理工学科准教授などを経て、2018年、東京大学大学院情報理工学系研究科教授に就任。専門は数理最適化。

2016年9月、理化学研究所革新知能統合研究センター(理研AIP)連続最適化チーム チームリーダーに就任。2020年1月より数理最適化分野の一流国際雑誌SIAM Journal on OptimizationのAssociate Editorを務める。参考) <https://www.or.mist.i.u-tokyo.ac.jp/takeda/profile-j.html>





理研AIP
言語情報アクセス技術チーム
客員研究員
すずき ひさみ
鈴木 久美さん

偶然からマイクロソフト入社 小さな興味と好奇心の積み重ねで思いがけない仕事に

長年、マイクロソフト本社で仕事をした関係でいまでも研究の拠点を米シアトルに置く。専門は言語処理。「言語処理というのは、人の言葉をコンピューターで扱う技術のことです。いま注目を集めているChatGPTもそうですし、アレクサやSiriのような音声アシスタントや、みなさんが毎日使っている日本語入力のかな漢字変換もみな、言語処理の技術を使っています」

アメリカの大学院からマイクロソフト本社と、米国生活が長い鈴木さんだが、そんな彼女にとって人生で一番のカルチャーショックはその米国よりも、東京の国際基督教大学(ICU)に入学した時だった。

「山梨県の県立高校からICUに入ると、授業はほとんど英語で行われ、帰国子女らのバイリンガルが当たり前の世界で、当初は度肝を抜かれました」と鈴木さんは振り返る。

それでも、高校時代から英語が好きだった鈴木さんはICUでは同時通訳のコースを学ぶと同時に、「言語学」という高校にはない科目があることを知り、次に進んだシカゴ大学大学院では、その言語学を専門に研究した。この時は、言語をコンピューターで解析する技術はまだ広くは普及しておらず、「コンピューターとは関係なく、人の言葉に共通の

特徴を研究する言語学を研究していました」

コンピューターにつながり、言語処理が専門に

そんな折、シカゴ大学の指導教官から「マイクロソフトの研究所が日本語のできる人を探している」と言われ、大学院修了後は同社に入社することに。ここが人生の分岐点になった。

「偶然、仕事が見つかったようなもの。マイクロソフトの研究所では英語や日本語など7言語を解析し、共通の意味の表現に近づけていく研究をしていましたが、そんな仕事が存在するなんて知らなかったし、もしそれより数年前だったらそもそもこの仕事は存在していなかったと思います」

米国を舞台としたIT研究が超速に進歩する中に身を置いていたら、結果的にその専門は最先端の言語処理になっていた。その後は、研究所から事業部に移り、プログラム・マネージャーとして、対話型検索のBingChat(現Copilot)にも携わった。「プログラム・マネージャーという仕事も、入社するまでその存在を知りませんでした。会社で仕事をしていくうちにやりがいのありそうな仕事だなと思って、転職しました。結果的には

研究を俯瞰して見られるようなよい経験になりました」「言語学を学んでいた私がコンピューターにつながり、専門分野が理系になったことは、半分は驚きですが、半分はアメリカの環境にあるのかも。アメリカには文系・理系という

言語学はいったいどちらなのでしょう(笑)」

最先端IT業界での仕事

マイクロソフトには27年間勤務。変化の激しいIT業界では、最先端の技術が生まれてはそれ以前の技術やサービスは消え去っていく。それでも、志をともにする同僚と一緒に研究や開発をし続けることがこの仕事の魅力だという。

そんな鈴木さんは現在、理研AIP言語情報アクセス技術チームに入り、大規模言語モデルの研究をしている。「ChatGPTやCopilotを動かしている大規模言語モデルの出現は、言語処理研究にとっては大事件です。まだまだ仕組みが分からないことだらけで、これから研究が進んでいくのは楽しみです」

海外は気軽に行けばいい

海外での仕事の醍醐味に触れ、「いろんな人がいるので、単純に面白い。あと私は気が散りやすく、日本にいとおいしい食べ物や温泉など誘惑が多すぎるので、その点アメリカは仕事に集中できます(笑)。私は面白い仕事が見つかったのでまたま長く住んでいます。いつでも帰ってこられるので、興味がある人は気軽に行ってみるのがよいと思います」と話す。

高校生の将来の進路については「やりたいことが見つからないことも多い。でも将来のことは予測できません。少しでも興味があることをやってみれば、その次が見えてきます。大きな夢がなくても、そういうプロセスの積み重ねで進んでいくのもとてもおもしろいのでは」とアドバイスを送った。

経歴

すずき・ひさみ 国際基督教大学(ICU)卒業。2002年、米シカゴ大学大学院人文科学部言語学科にて言語学博士号を取得。1995年マイクロソフト入社。2023年から理化学研究所革新知能統合研究センター(理研AIP)言語情報アクセス技術チーム客員研究員。



2024年4月より国立情報学研究所大規模言語モデル研究開発センター特任教授。



東京大学
定量生命科学研究所
助教

理研AIP
不完全情報学習チーム
客員研究員

かわさき ふみこ
河崎 史子さん

有機合成化学から生命科学に…研究テーマ が変化し、いろいろな分野と繋がる

「一時期、プリン作りにはまりました。卵や砂糖の分量や加熱方法で出来の良さが変わるので、色々試行錯誤が必要という意味であれば、これもサイエンスですね」と満面の笑みで話す。そんな河崎さんは、東京大学定量生命科学研究所で研究に没頭するが、家に帰れば小学生の子を持つ母である。

「研究職は朝から晩までというイメージがありますが、私は仕事以外も大切にしながら研究を続けています。仕事をし、帰宅して家族揃ってテーブルを囲む。料理など家事は同じく研究職である夫と協力し、休みには家族で出かけますよ」と日々の生活を語る。

AIの登場で細胞の データ処理が様変わり

専門は生命科学だ。「生命の構成単位である細胞を計測する研究をしています。細胞の中にはさまざまな種類の分子があり、これらが合成されたり、分解されたり、くっついたりするというイベントが無数にあって、細胞の活動が支えられています。それぞれのイベントがい

つどこで起こるとどうなるかという台本を理解して書き出すのが基礎の生命科学の仕事です。人が処理するのでは扱いきれない膨大な細胞の計測データを活用して生命科学研究所を加速するために、人工知能(AI)の活躍が期待されています」

米、独、英…夫の海外転勤に同行

河崎さんは大学の頃から変わらずこの道一筋、というわけではない。大学・大学院では有機合成化学を研究し、卒業後もテーマは変わっていった。その理由を聞くと意外な答えが返ってきた。

「夫の海外の転勤に同行したから」

夫の転勤先の国々で興味を持てる研究所を見つけ、自分ができることをアピールして就業にこぎつけたという。米国サンディエゴの研究所では合成化学を使った疾患メカニズムの基礎研究を行った。その後、独ベルリンを経由して英国の研究所へと転職していくうちに、分子生物学分野寄りの研究となり、細胞の計測も習得。帰国後は理化学研究所を経て、東京大学の定量生命科学研究所に。現在は遺伝子制御の複雑さに興味があり、RNAの機能などを研究している。

「ずっと同じ分野を深め続ける専門研究でこそできることもあります。私が、私のように変化していくのもいいですよ。い

ろいろな分野と繋がっていただけますから」

研究分野を変えると苦労するのではと思うが、それすらおもしろがって仕事をしてきたようだ。

「違う分野に行くと、最初は周囲の人が言っていることが分からないから大変ですが、逆にそれを学んでいくことは楽しいです。面食らう考え方に出くわしても、そういう見方もあるんだと知ることができます」

研究職で仕事と家庭の 両立を目指す

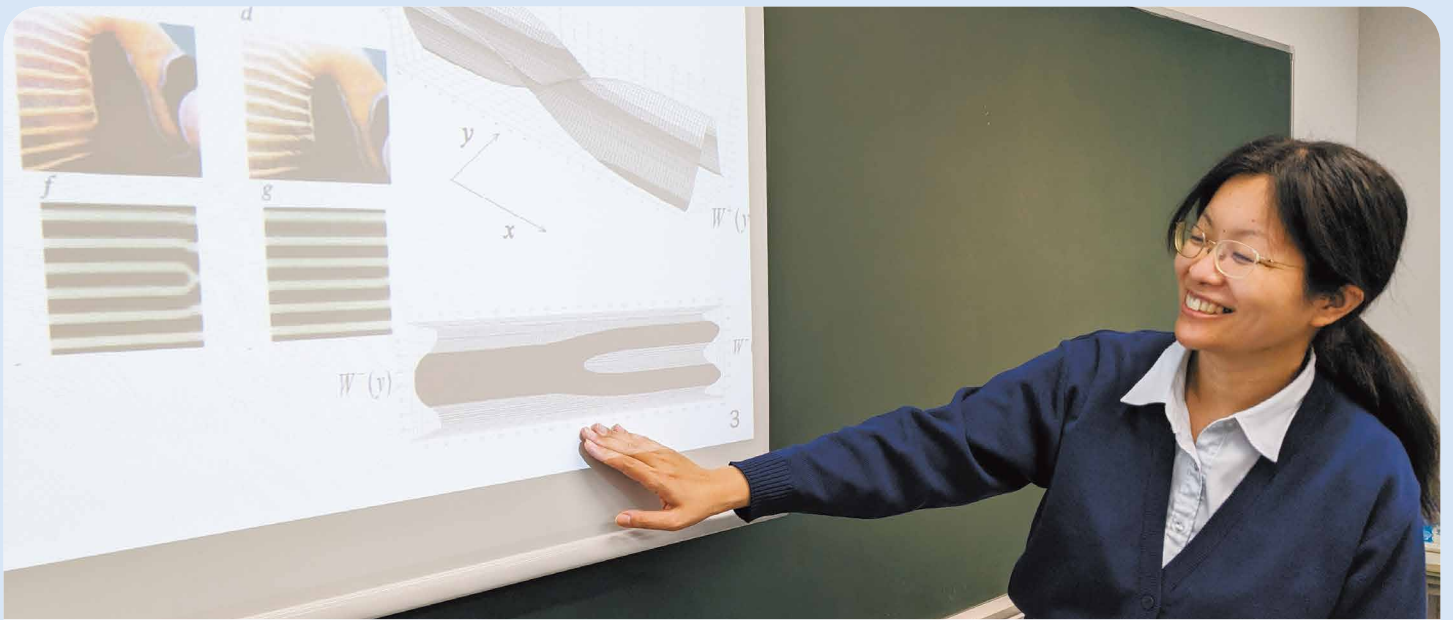
次々と関心を持って取り組む姿勢は、高校時代から変わらない。世界史や生物が好きで、その図録の副読本は何度も見ているうちに、ほぼ丸ごと覚えてしまったそうだ。数学も古典も音楽も好きだった。演劇部に所属し、演じる側でなく舞台装置や照明係に夢中になった。

河崎さんは女子高校生に次のようなメッセージを送る。

「研究の分野は横断的なので、中学から高校時代に習う多くの科目も何かしらで研究に繋がっています。入ったら最後まで一本道というわけでもないので、好きな科目を手がかりに入口を探してみると良い。今、研究の世界では、好きな専門に一筋の人も、色々経験したい研究者も、チャンスをもたらせる環境ができつつあります。しかもフレキシブルな働き方も選べるので、研究職は意外と仕事とプライベートを両立しやすい。だから飛び込んでほしい」

経歴 かわさき・ふみこ 東京大学工学部化学生命工学科を卒業後、同大学院新領域創成科学研究科メディカルゲノム専攻修士課程、博士課程修了。海外の研究所や理化学研究所研究員を経て、2022年、東京大学定量生命科学研究所助教に就任。理化学研究所革新知能統合研究センター(理研AIP)不完全情報学習チーム客員研究員。専門は化学、生命科学。





苦手な科目でも継続すれば得意に

「魚のしま模様の発生メカニズムが数学の研究を通して理解できるかもしれません」

白板に映し出されたのは、非線形偏微分方程式と呼ばれる数式だ。

関坂さんによれば、数学は物理、生物、経済など様々な分野と繋がっているという。「数学を研究しているのに、気がつけば生物の模様などが頭に浮かぶ、そのような広がりがとても面白いんです」と関坂さん。

嫌いな科目が大学では好きな科目に

中 学・高校時代、理系科目はよくできた。しかし今思えば数学は好きな科目ではなかった。授業で習う数学は問題の解法ばかりで、それが何なのかよくわからないまま問題を解いていった。「問題を解くこと自体は嫌いではないですが、その式や問題が結局、何を意味しているのかわからないことがストレスでした」

学んでいけばいつわかるかもしれない、そんな期待を胸に大学へ進学した。高校の先生に勧められ工学部に入ったが、心の中で求めていたのは数学だった。工学部にいながら、理学部の数学の講義を受けて感動した。本当に学びたいことはこれだと感じ、理学部数学科へ転学した。そこで出会った数学は中学・高校までと大きく違い、数とは何か？ 無限大や収束

とは何なのか？ という基本的なことを理解できるまで考える必要があった。

「大学の数学、特に理学部数学科での数学はとても難しく、“行間”を少しずつ埋めながら何度も復習しました。それでもわからないまま問題を解いて感じたストレスはもうありませんでした」

中学・高校で嫌いな科目に悩んでいる場合、「そこが終わりではなく、より面白く興味深いことを学ぶための準備だと思っしてほしい」と言う。

大学2年で数学科に転部

数 学者は、1つの式を導き出すことや、その式を解くことに何日も、何年もかけることがある。関坂さんは将来、数学者や研究者を志す高校生に次のように話す。

「数学者に向き、不向きがあるとすれば、1つのことを考えていける人は向いていると思いますし、諦めずに試行錯誤を続けられるかどうか、研究者に向いているかどうかの分かれ目でしょう。私は暗記が苦手な歴史などの科目は苦労しました。苦手な科目であっても諦めずに努力

理研AIP
数理科学チーム
上級研究員

せきさか ひろこ
関坂 宏子さん

を続ければ得意になると思っています」

研究者に向いている人

関 坂さんは将来、数学者や研究者を志す高校生に次のように話す。

「数学者に向き、不向きがあるとすれば、1つのことを考えていける人は向いていると思うし、研究することが好きか、好きでないかが、研究者に向いているかどうかの分かれ目でしょう。私は暗記物が好きではなく、歴史などは苦手でした。それでも苦手な科目であってもやっていけば得意になると思っています」

経歴 せきさか・ひろこ 2009年、埼玉大学理学部数学科卒業。東北大学大学院理学研究科数学専攻博士課程前期・後期修了。2014～2017年、東北大学・明治大学にて研究員。2018年、東京大学大学院数理科学研究科助教。2022年より現職の理化学研究所革新知能統合研究センター(理研AIP)数理科学チーム上級研究員。



理研AIP
認知行動支援技術チーム
特別研究員

くまがい かずみ
熊谷 和実さん



ドラえもんのようなロボットを作りたい、 答えが見えたときの醍醐味は格別

「小さいときからドラえもんが大好きで、ドラえもんの絵をよく描いていました。高校で進路選択のとき、ドラえもんのようなロボットを作りたいと思って工学部に進むことに決めました」と語る熊谷さんは、理化学研究所革新知能統合研究センター（理研AIP）の若手研究者である。同センターは、革新的な人工知能（AI）技術を開発し、それを実社会の課題解決に活かすことを目指している。

高齢者と対話する AIロボットの開発

熊 谷さんがドラえもんに惹かれた理由は、ポケットと、そこから出てくるたくさんの不思議な道具かと思いきやさにあらず。

「頼りないのび太君とうまくコミュニケーションを取りながら助けてあげる。そんなドラえもんの姿が良かったんです」

この思いはそのまま現在の研究に繋がっている。

「会話をしたり、人の表情を見てコミュニケーションをとったりするAIロボットを研究しています。ユーザーの対象は高齢者。ロボットがどのように声を掛けるとよりよい返答ができるのか、効果を得ることができるのかを実験しています」

近年、高齢化が進む国内では高齢者の孤立や健康が問題になっているが、この研

究はロボットとの会話で日常生活の困っていることを聞き出すほか、うれしい、楽しいなどの気持ちを話すことで幸せを感じてもらい、より健康になれることを目的としている。「人は年をとりますが、できなくなることが増えあきらめてしまうのではなく、楽しく過ごせるようサポートする技術を開発しています」と語る。研究所内では、「ぼのちゃん」と名付けたAIロボットと高齢者が対話をする体験会も行われ、家庭や高齢者施設、病院などに置く実用化が待たれている。

ロボット体験が進路の決め手

子 どもの頃の憧れそのままの道に進んだ熊谷さんは、どんな学生時代を送ったのだろうか。

「中学・高校時代は一貫校でしたので、6年間ソフトボール部に所属して一生懸命やりました。物作りが好きだったため、美術が得意でした。理科はあまり点数がよいほうではありませんでした。高校で理系コースを取っていました」

大学は東京農工大学機械システム工学科に入学し、1年生の半年間、ソフトウェアを使ってロボッ

トを動かす研究室を体験する機会があった。これが後に研究室を決める際の決め手となったという。

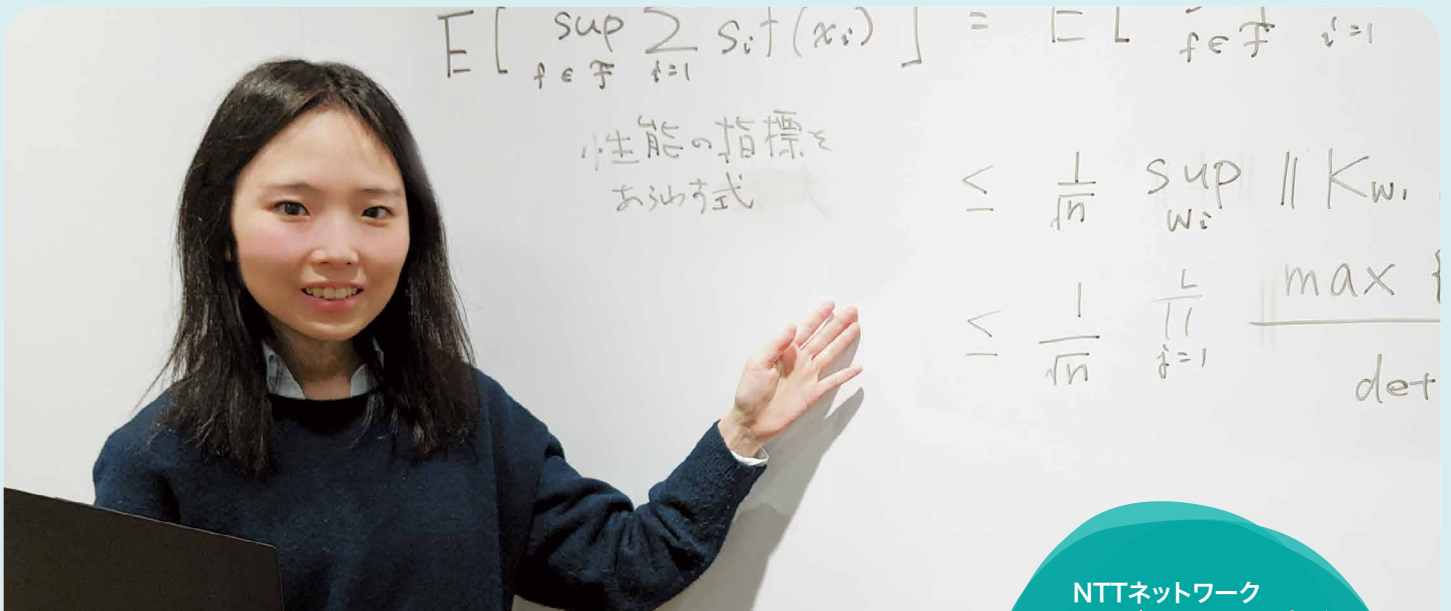
「研究では、高校の数学や物理の基本、英語も必要です。ロボットはさまざまな分野に応用できるので歴史や地理、国語もしっかり勉強しておくに役に立ちますよ。私は大学院に入って以降、文系の大切さを実感していますから」

熊谷さんは研究職を目指す高校生には、探求する醍醐味を知ってほしいと願っている。

「今は研究の打ち合わせなどはリモートでできるし、先輩の女性研究者も子育てしながら研究に励む働き方をされています。研究は、考えても考えてもなかなか答えが出ないときほど、答えが見えたときの喜びは大きいんですよ。この楽しさを味わってほしい。私もまだまだこの先、人それぞれの違った感情や表情を読める、もっとドラえもんに近いロボットを作りたいですね」

経歴 くまがい・かずみ 2014年、東京農工大学工学部機械システム工学科を卒業。同大学院工学府機械システム工学専攻博士前期課程・後期課程を修了。2023年6月から理化学研究所革新知能統合研究センター（理研AIP）認知行動支援技術チーム特別研究員。
<https://kkkazumi.github.io/index.html>





暗記よりも考える力が大切 好きなことを大事にしてほしい

「高校時代、数学をはじめ物理、化学が好きで、将来は、科学技術分野の方面に関わっていきたくて思っていました」と橋本さん。「数学は、ゆっくりと理解するタイプでした。受験勉強で解いていく中で数学の魅力を見つけていきました」

大学では応用数学の研究室に入り、さらに大学院では、数値計算の研究をした。線形代数やスペクトル理論を使った研究だ。興味があったのは数学の社会での応用で、数学がどのような場面で応用できるのかを見てみたいと思い、研究の場としてNTTを選んだ。

数学で社会課題の解決を

NTTには、基礎研究だけでなく実用研究や開発をする人がたくさんいて、自分とは違うフェーズやアプローチで研究するなど自分では思いつかない観点で取り組んでおり、教えられることが多いそうだ。

橋本さんが目指す数学の応用とは、「現実世界のデータと理論上の数学の世界をいかにして結びつけるか」というコンセプトであり、現在、「C*環・作用素論に基づいた複雑データの解析法」を研究している。C*環（シースターかん）は作用素環論の主要な研究対象であり、作用素とは数学で1つの集合の元を他の集合の元に対応させる規則を指す。

同解析法の利点について次のように話す。

「時系列のデータを解析する場合、従来は各時間のデータをバラバラな『点』の集まりとしてとらえていましたが、この解析法では『線』としてとらえられ、より高度なデータ解析が可能になります」

具体的には、同解析法を動物の脳波・体温などの生体のデータ分析などに用いている。また、高精度に分析したデータを用いて災害・トラブルの事前異常検知を行ったり、通信トラフィック・信号による未知の異常への対応を行ったりすることも研究しているそうだ。

今後の研究ビジョンについて、「複雑データの解析が求められる通信ネットワークを含めたさまざまな分野に同解析法を応用し、多くの社会課題を解決していくことです。例えば、同解析法の枠組みを異常検知に応用し、サービス運用の自動化に貢献することが可能になると考えていま

NTTネットワーク
サービスシステム研究所
特別研究員

理研AIP
構造的学習チーム
客員研究員

はしもと ゆか
橋本 悠香さん

す」と橋本さんは夢をふくらませます。

自分で研究テーマを決める

橋本さんは「中学・高校は、与えられた問題を解くことが多かったが、いまは自分で問題を発見していく。自分で研究テーマを決めることは学生時代とは違うところです」と語る。

理系を目指す女子高校生には、「高校時代の成績が良い人だけが研究者に向いているというわけではないと思います。高校の数学や物理で、公式などはある程度覚えなといけません、それより『考える力』が一番大切です。私は数学が好きだから続けてこられた。自分の好きなものを楽しんでやっていくことが大切なのではないでしょうか」と呼び掛けた。

経歴 はしもと・ゆか 小・中学校を中国で過ごす。慶應義塾大学理工学部数理科学科卒業。同大学院理工学研究科基礎理工学専攻博士課程修了。2018年、日本電信電話株式会社（NTT）入社。現在、ネットワークサービスシステム研究所（旧ネットワーク基盤技術研究所）特別研究員として、ネットワーク運用自動化に関する基礎技術の研究を行う。慶應義塾大学藤原賞、同大学米沢富美子賞をそれぞれ受賞。2022年から理化学研究所革新知能統合研究センター（理研AIP）構造的学習チーム客員研究員。

<https://www.rd.ntt/ns/qos/person/hashimoto/>



革新知能統合研究センター

革新的AI基盤技術の開発で社会課題の解決に挑む

理化学研究所革新知能統合研究センター(理研AIP、杉山将センター長)は、革新的な人工知能(AI)基盤技術を開発し、それらを応用することにより、科学研究の進歩や実社会における課題解決に貢献するよう、精力的に研究を展開している。加えて、AI技術の普及に伴って生じる倫理的・法的・社会的問題に関する研究を行っている。

運営ビジョンについて杉山センター長は、「機械学習の技術を軸足に基礎から応用・社会まで一気通貫の研究体制を敷いている」とした上で、「産学官で連携し、研究成果を国際的に発信する。国際的な高度AI人材の登竜門を目指す」と話す。

理研AIPの組織

理研AIPは2016年、文部科学省AIPプロジェクトの研究拠点として設置された。内閣府AI戦略2022におけるAI関連中核センター群の1つに位置づけられている。

国内では40以上の企業と共同研究を実施し、産業技術総合研究所(AIRC)や情報通信研究機構(UCRI/CiNet)とも連携している。また、海外でも40超の大学・研究機関と共同研究等を実施している。

1

汎用基盤技術研究グループ

深層学習の仕組みの解明や、新しい原理に基づく次世代AI技術の創出を目指す。

2

目的指向基盤技術研究グループ

再生医療・材料開発・ものづくりなど日本が高い国際競争力を持つ分野の強化、および高齢者ヘルスケア・防災減災・インフラ管理といった社会的課題への取り組み等を進めている。

3

社会における人工知能研究グループ

データ流通やプライバシー保護に関する技術開発や、法整備を含めた人とAIの関わり方について研究している。

さらに、世界的に不足しているAI関連人材の育成も行っている。

外国人・女性を多数在籍、多様性ある人員構成

理研AIPの常勤研究員は2023年12月1日現在、総勢137人で、そのうち外国人が40%、女性が22%をそれぞれ占め、多様性のある人員構成となっている。世界各地から客員研究員、実習生が集まっており、研究を展開している。



理化学研究所 革新知能統合研究センター

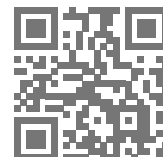
冊子「AI時代の君たちは何を学ぶのか 先輩女性研究者から珠玉のメッセージ」

2024年3月25日発行

発行元:理化学研究所 革新知能統合研究センター(理研AIP)

所在地:〒103-0027 東京都中央区日本橋1-4-1 日本橋一丁目三井ビルディング 15階

取材・制作:アーバン・コム合同会社(代表:小松利央、編集デスク:大家俊夫)



RIKEN 2024-024